

平成二十七年七月二十七日

六月、手術せり。

何年か振りの超音波検査にて膽嚢の内に異物見出さる。これ膽石なり。醫師より、形状看過すべからざるものなれば、膽嚢ごと取出だすべしとのご託宣なり。世に珍しからざる手術なりと至極事務的に言へり。

腹を割きて臓物を取り出だす。魚や鳥の腹にあらず、他人の腹にあらず、まさに吾輩の腹なり。日々我と生き、我と生活を共にする我身の中なる内臓を、他の臓器より無理矢理切離し、掴み出さむとするなり。

指に小さき棘刺さりても痛きものを、臓物取出だせるほどに腹切らばいかほど痛きか。血、多量に出づべし。我は豫防注射受くる時も針、腕に入るを見るが怖しくして一心に目をそらす臆病者なり。この世に生を享けしより六十八年、我の體、未だかつてメス入りたることなし。これを一生の大事と言はずば、他に何の大事がある。

施術六日前の日、擔當醫師に面談す。技術面の説明に加へ毎年萬餘の手術例ありなど言ひ、患者が不安を除かむとす。別れ際、書類數個を出だしてさりげなく署名求む。執刀、麻酔、輸血、その他により後遺症或は死に至るリスクあるを確認するものなり。この醫師いかに優しげに甘言を弄すと雖も、手術かくも危険なることこれら書面に明らかなり。手術の本性垣間見て、我が恐怖いや増しに増す。失敗の確率極小の數値示さるるとも、我身にとりては成功不成功の二者擇一にして、安心の境地には到底至らざりき。しかのみならず、この手術、腹腔鏡によるものらし。我、その技の何たるかを詳らかにせずと雖も、先ごろ某大學病院にて腹腔鏡手術失敗例多發し、新聞紙面を賑はせるは記憶に新し。恐ろし。

兔にも角にも入院。翌日、待つうちその時刻になりて案内の看護師來る。刑場に向ふ死刑囚の心を思ひ、悄然、彼女に引かれてゆるゆる歩む。エレベータに乗り、手術専用フロアに至りてその扉開けば、薄暗き中にスライド兩開きの硝子の戸あり。附き添ひの妻これより中に入ること叶はず、我に勵ましを言ふ。何事か言ひ返さむとすれど既に恐怖に囚はれ言葉出でず。

硝子戸の内に入れば、我が身柄、中なる看護師に引き繼がる。一步進むごとに膝震へ、足、我がものならざるが如し。さらに行けば、明かりなほ乏しく、室温更に下がる心地す。白衣、緑衣の數人我を待受けたり。我が眼鏡すでに沒收せられれば顔、男女の別定かならず。彼等兩手にメスを翳し、その視線、獲物を狙ふが如く我が腹に向く。これ錯覺にして唯、挨拶なりたるや、今、いづれとも言へず。

彼等に伴はれ更に行きて奥なる室に入る。十字架狀の寢臺あり。命ぜられそが上に横たはれば、左右に伸ばす兩腕、臺に括り附けられ磔の狀となる。我を取り卷く輩の一人、

確認のため名前をと促す。「我こそ兒玉稔なれ。ここに見參の上は、切るなり刺すなり存分にお仕置き下されえ！」と大音聲に名乗らばさぞかし良からむものを、と思ひしは退院の後のことにて、この時は只管怖しく、震へる小聲にて僅かに姓名のみ發するが精一杯にてぞありける。

(平成二十七年八月十三日受附)